

夫婦の相性

「すれ違うほど、相性がいい」という真実

貴女がタイタニックに乗っていたら

人妻であるひとに、こんな質問をしてみる。

「貴女が、タイタニック号に乗っているとしましょう。船には、夫と、貴女自身の素敵な恋人も同乗しています（心当たりのない場合は、ときめくようなイケメン男子を想像してください）。

大きな衝撃と同時に船が停止して15分後、船の灯りが消え、非常灯だけになりました。船はゆっくりと傾きだし、一つの街のように大きい船の真ん中において、貴女はどちらに向かって逃げたらいいかさえもわからない。

その時、夫と恋人が同時に貴女のもとに駆けつけ、手をさし出しました。さあ、貴女は、どちらの手を取りますか？」

ある時期、研究の一環として、この質問を繰り返したことがあった。この質問に対する回答は、ほぼ100%「夫」なのである。

「ほぼ」と表現したのは、回答をはぐらかす人がいるためで、潔く「恋人」と答えた人は一人もいない。

実に、夫に不満たつぷりで、今にも離婚を切り出そうとしている女性でも、迷わず「夫」と答える。「夫はいつものようにむかつくことを言って、きつと私たちは口喧嘩をしながら船内を走ることになるけれど、夫は、必ず私を生かして帰してくれる。そんな気がする」と。

私は「まあ、すてき。とても相性のいいご夫婦なのね」と、心の底から祝福することになる。

なぜなら、「互いにイラッとしてむかつくけれど、結果、生き残れる」ことこそが、



黒川伊保子

株式会社感性リサーチ代表取締役

【くろかわ いほこ】人工知能エンジニア時代に、脳とことばの関係を研究。ネーミングの科学分析法を確立し、感性分析の専門家に。日本感性工学会評議員、倉敷芸術科学大学非常勤講師。近著に、『恋愛脳』『夫婦脳』（新潮文庫）『日本語はなぜ美しいのか』（集英社新書）など。公式サイト <http://www.ihoko.com/>

夫婦という単位の真の目的であって、妻がこの質問に、「うう。悔しいけど、夫だわ」と答えられる夫婦こそが、最高に相性が高い夫婦なのである。

あの素晴らしい愛は、どこにある？

昔、「あの時 同じ花を見て 美しいと言った二人の 心と心が今はもう通わないあの素晴らしい 愛をもう一度」という歌謡曲があったつけ。35年前、初恋が見事な色あせた直後の私は、この歌を口ずさみながら「永遠に心がすれ違わない運命の人に早く出逢いたい」と祈ったものだ。

けれど、脳科学の研鑽を重ねた今は、恐ろしい真実を知ってしまった。

恋に落ちる男女は、生物多様性の論理にのっつって、感性が正反対の相手を選ぶ。

つまり、そもそも「この世で最も心が通いにくい相手」を選んで発情するのである。ということとは、「同じ花を見て、同じように心を動かし、心と心が通う」ことが、素晴らしい愛々というのなら、恋する男女の間に、愛は存在しないことになってしまう。

脳科学的に、夫婦は、「同じものを見て、同じように感じ、共感と敬愛でしみじみとことばを交わす」ようにはできていない。人は皆、ついつい、それを期待してしまうのだけだ。こと夫婦という単位を見つめるのなら、この真実から目をそむけてはならないと思う。あきらめよ、と言うつもりはない。「違うからこそ、愛しい」と思う大人の教養で、夫婦関係は深めなければならないのである。

生物多様性の論理

地球上の生物のほとんどは、生殖をその存在の第一使命としている。

地球上には酸素という毒があり、これが細胞を老化させるために、死を余儀なくされているからだ。しかしながら、そのおかげで、生殖していのちをつなぐという素晴らしいシステムが誕生したのである。

地球上に酸素がなければ、単細胞動物は、そのまま何億年も生きて、進化を遂げるチャンスがない。いのちのリレーをするから、遺伝子が組み替えられ、進化が生じる。その進化の果てに、われわれ人類がいる。

生殖して、遺伝子を残す。その最も効率的な方法は、「異質のもの同士を掛け合わせ」そして「生殖機会ごとに相手を変えること」に他ならない。もちろん、染色体の数が異なるわけにはいかないから、当然同種の掛け合わせの中での話にはなるが。

つまるところ、感性の違うもの同士が恋

に落ち、子どもの2人もつくれば、相手を替えて新たな遺伝子の配合に励むほうが、遺伝子の残り方は多様性を極め、子孫の生存可能性が上がることになる。

この世の恋のほとんどすべてが、「永遠の愛」とはならない理由がここにある。



夫婦で、エアコンの理想の設定温度が一致しないわけ

動物は、フェロモンと呼ばれる物質を頼りに生殖相手を取捨選択していると言われている。

フェロモンは、生殖ホルモンに連動して分泌される「匂い物質」で、嗅覚で感知する。ただし、ほとんどは潜在意識のもとに処理されてしまうので、嗅いだ際に、明確にそれとわかることはないようである。

このフェロモンは、その匂いの種類が、遺伝子の免疫抗体の型に連動している。つまり、動物は、匂いで、周囲に自らの免疫抗体の型の種類を知らせているのである。

免疫抗体の型は、その個体の生体としての感性を決める。外的刺激の何に強く、何に弱い。それは、気質や体質に影響を与え、生活習慣をも決してしまう。この型が異なる相手と生殖すれば、子孫のバリエーションが増えるのである。

平たく言えば、寒さに強い個体と、暑さに強い個体が交配すれば、子孫には、どちらの型も混じることになる。地球が温暖化しても寒冷化しても、誰かは生き残る。

つまり、エアコンの理想の設定温度が一致する夫婦は、理論上、存在しないことになる。どちらかが快適なら、どちらかが寒い（あるいは暑い）のが「相性のいい夫婦」というものなのだ。

ついでに言えば、どちらかが寝つきがよければ、どちらかが寝つきが悪い。どちらかが神経質なら、どちらかはおおらかである。歯磨きのチューブは、どちらかが真ん中から無造作に絞りだし、どちらかはそこから几帳面に絞り出す。いきなり大きな音が鳴れば、どちらかは逃げ出し、どちらかはしやがみこむ。きつと、どちらかは生き残る。

そして、旅に出れば、全然別のものが入り、まったく違うものに心を動かす。片方が、「空の青」に感動している傍らで、片方は「団子の蜜」に注目している。片方が「今の時間」に没頭している傍らで、片方は「次の予定」に心囚われる。

心通わすには、なかなか難しい相手だが、危険察知には向いている。また、あらゆる可能性を網羅する相棒としても最適なのである。

だからこそ、「沈みつつある巨大船タイタニックの生き残りの相棒」に、「いらつき、むかつく配偶者」ほど頼りになる相手はいないのだ。妻たちは、直感でそれを知っている。

夫婦という道のり

夫婦は、フェロモン判定により、本能的な恋に落ちて結婚し、生殖をする。恋の魔法が解けると、「この人、なんでこうなのかしら」「今、なぜ、それ言う?」「意味がわからん」「うー、鈍感!」とつぶやきながら、何とか日々を過ごすことになる。まあとき

には、心が通じ合ったような気がして嬉しい日もある。また、ときには、生殖多様性の本能の導くままに、別の遺伝子の持ち主に心奪われ、人生の嵐に見舞われることもある。

しかし、時を重ねるごとに、不思議な愛着がひたひたと溜まってくる。恋が終わって、情がわく。脳科学上、夫婦という道のりはそのように設計されている。

この世に、「普通の素晴らしい愛」があると思えば、目の前の配偶者に耐えられないこともあると思う。けれど、生物多様性の論理にのっとって、相容れない相手と、つかのまの相席（何万年も連綿と続く遺伝子の旅からすればね）を楽しむのが人生だと思ってみれば、すれ違うことがなかなか面白くなってくる。「おー、そうきたか」とくすりと笑って、なんだか愛おしくなる。こんな夫に比べたら、思った通りの答えが返ってくる理想の男子なんて、きつと飽きちゃうだろうなあと、私は思っ

てさえる。

というわけで、すれ違いを楽しもう。この世のすべての夫婦に、そう伝えたい。

男性脳は、頼りにされて愛着がわく

恋が終わって情がわく。さて、では、その情は、どこからわくのだろうか。

実は、男女の脳で、情のわき方が違うの

である。

男性脳は、責務を果たすことに快感がある。このため、習慣的に責務を果たしてきた対象に情がわく傾向が強い。長年にわたって責務を果たし、それを評価してくれた会社への愛着は、だから、女性たちの想像を超えるのである。

毎日妻のもとに帰り、毎週ごみを捨て、毎月生活費を渡す。家族を養っていくことの責任を果たす、その繰り返しだが、男性脳に愛着をもたらすのである。

男性脳というのは、愛しい脳で、その人が「きれいで、料理がうまい」から離れないのではない。その人が「自分がいなければ、生きていけない」から離れられなくなるのである。

だから、妻たちには言っておきたい。夫を頼りにしてください。特に定年退職して家に入った夫には、「あなたがいなきゃ、家が回らない」と甘えてあげられる責務をあげよう。長年のベテラン主婦なら、自分ではなんだつてできるかもしれないけれど、そこをぐつと耐えて。「包丁は、パパが研いでくれなきゃ、やつぱり駄目ね」とかね。

実は、私は、電球が替えられない。瓶のふたもそうなのだが、スクリーンキャップをうまくしめられないのだ。天井に向かって仰向けになったら、これはもうほぼ不可能である。電球が切れると夫を呼ぶ。「あなたがなくなったら、生きていけないわね」と言いながら、電球を替えてもらう。夫はたぶん、

若い女性にうつつを抜かしても、電球が替えられない妻を捨てるのは不憫に思っ躊躇するだろう。「電球替え」は、私たち夫婦をつなぐ絆と言っても過言ではない。

ただ、最近、LEDになって電球の寿命が格段延びた。最新のものは25年だとか。私たちの寿命と、次の電球替え、どっちが先なのだろう？ 別の手を考えなければね。

女性脳は、共感してもらって愛着がわく

一方、女性脳は、共感してもらうことに快感がある。

これは、子育てのために与えられた本能の一つ。人類は、子育てを担当する個体が群れの中にいたほうが生存可能性が上がる種なので、女性脳には、群れを構築する本能として、高い共感欲求が備わっているのである。「今の気持ちをごまかして、誰かと分かち合いたい」という本能によって、自在に群れを構築し、潜在情報を交換し合う。

このため、女性は、話を聞いてもらって共感してもらうと、とても気持ちがいいのだ。共感し合うために話をするので、オチがないことも多いし、話がそれても気にしないのである。

というわけで、男たちに言っておきたい。女性の話は、気持ちよく相手のことばを反復しながら聞いてあげてほしい。

「今日は寒かったわ」と言ったら、「寒かったね」と共感してあげればいい。「今朝、天気予報で言ってただろう」などと余計なことは言わなくていいのである。

携帯電話、直る

と、ここまで原稿を書いたところで、夫が「きみの携帯電話、直ったよ」と声をかけてきた。

昨日から、どこで電源を入れても「圏外」のまま、送受信が不可能だったのである。私は、アンテナの故障だと判断し、本日、原稿が仕上がったら、ショップに修理に持ち込むところだった。

彼曰く、「バッテリーを出して入れ直したら、動いた」そうで、「きみは、何にせよ、努力が足りない」と言う。

「バッテリー!? 電源はちゃんと入っていたのよ。だから、電源接触不良とも思えなかったし、そんなの無駄だと思った」と言ったら、「再起動、バッテリーの出し入れ、センサー面を掃除する、は基本。無駄かどうかの判断の前には、なんだぞうだ。え、そうなの!?

うーん、雨の中、ショップに行つて、電源差し入れだけで終わるところだった。今回の携帯の通話にのちがかかっていたら、夫に救われたことになったなあ。やつぱり、タイタニックのパートナーは、彼しかないようである。